

久留米大学文学部紀要
国際文化学科編第28号 (2011)

『クラレル』における信仰

道 永 周 三

On Faith in *Clarel*

Shuzo MICHINAGA

【要約】 『クラレル』と作者の宗教

Herman Melville (1819-91) の *Clarel* (1876) は主人公の聖地巡礼を描く宗教詩だが、その内容の難解さでつとに名高い。また、主人公のクラレル自身に魅力を感じる読者も、そう多くはないと思われる。しかし、この作品には主人公だけでなく、語り手と作者における信仰と懐疑の問題が色濃く存在する。作者個人の信仰を踏まえて、主人公の信仰の在り方を考えて見たい。

【キーワード】 Melville の詩, Melville の宗教観

序 論

ハーマン・メルヴィルの長編詩『クラレル』(1876) について Ronald Mason は “it is as important to appreciate *Clarel* as it is to appreciate *Moby-Dick*” と述べたが、¹ この作品が抱える難解さの故に研究成果が単行本の形を多く取ってきたわけではない。本格的に『クラレル』を論じた最初の研究者 Walter E. Bezanson は、『クラレル』の Hendricks House 版 (1960) を編集するに際しては、詳細な序文を付け加えることで後続の研究者に参入の道を広げてくれた。その後は筆者の知る限り『クラレル』を研究の対象に選んだのは Stan Goldman と William Potter の二人に過ぎない。前者は神学との関連に、後者は宗教学との関連に研究の重きをおいている。概略的にいえば、大方の識者の立場は二通りに分かれている。その良い例がエピローグに関するもので、「信仰」と「絶望」の力量の度合を描写した所では、肯定の立場に与する者と否定の立場に与する者との二分される。

批評の領域で両極の余地を読者に与えるのは通常この作家に多くありがちなことだが、『クラレル』を一読すれば、この作者の作品群の中でこの作品程「死」のモチーフに包まれたものはないことに我々は気づかされる。Stanley Brodwin は彼の論文の中で「種々な死という共通項(運命)への反応が描かれているのが『クラレル』だ」と述べているが、² 『クラレル』に描かれる六人の人物の死と主人公との関係を考えてみることは無駄ではない。無論、人間存在の究極の意味を問う死の問題は、にわかに作者の身に生じたわけではない。メルヴィルは1856年から1857年頃まで健康回復の為中近東にまで旅行の足を延ばしていたが、1876年の出版に至るまで彼の頭の中で聖地を舞台にした詩を手掛けたという夢は膨らんでいったらしい。実はこの二十年の間、アメリカは南北戦争という悲劇を経験し、彼自身も私生活において幾つかの死を体験している。まことに内憂外患

的苦境に生きた人であったが、そういう彼の人生経験が反映しているのが『クラレル』である。よって本稿では、主人公だけでなく語り手と作者における信仰と懐疑の問題を考えてみたい。

本 論

(1) Jerusalem

『クラレル』の第一部には幾つかの重要な事柄が見出せる。先ず初めに、神学生である主人公クラレルはまだ青臭い若者である。一月六日の公現日にエルサレムのホテルに着いた彼は、次のように自らを述べる。無論、この日が公現日という東方の三博士がベツレヘムを訪れたことに由来する記念日であっても、今の彼にはメシアの存在は問題ではない。

Needs be my soul,
Purged by the desert's subtle air
From bookish vapors, now is heir
To nature's influx of control;
(中略)
But here unlearning, how to me
Opes the expanse of time's vast sea!
Yes, I am young, but Asia old.
The books, the books not all have told. (I. i. 66-69, 80-83)³

このように、最初から若き学徒であるクラレルは、その若さの故に自分が未熟であるという点を認め、むしろ誠実にまた謙虚に現実世界から物事を学ぶ決意をする。その告白は真摯であり、彼の姿は素直さに満ちているが、机上の学問を通して宇宙や存在の問題を哲学的・神学的に解明しようと試みてきた彼にとって、今なお信仰の問題は複雑性を内包している。

Further his meditations aim,
Reverting to his different frame
Bygone. And then: "Can faith remove
Her light, because of late no plea
I've lifted to her source above?"
Dropping thereat upon the knee,
His lips he parted; but the word
Against the utterance demurred
And failed him. (I. i. 116-124)

あこがれのエルサレムに来ていながら、今の彼は不信仰の状態にあり、祈ろうとしても祈ることができない。前日まであった心の平安も一夜明けた今日は消滅しており、それは死

の心象と容易に結びつきやすい石の都のとあるホテルの一室 (“his cell / Or tomb-like chamber”) (I. ii. 92-93) に彼が旅装を解かざるを得ないことも関係している。生来の真面目さの為、祈れない自分に驚くクラレルではあるが、この自己に対する認識が実は第一部における彼を支えている。例えば、種々な民族が各々の宗教を携えて社会を形成しているこのエルサレムの地にいる時、クラレルは自分の宗教的アイデンティティーの欠乏を認め、自分はこの町では不敬の徒として咎められているのでは “O heart profane, / O pilgrim-infidel, be gone!” (I. vi. 18-19) と想像してみたり、聖書の中のイエス・キリストの復活は夢ではないのだと述べてくれる賢者 (“Some stranger of a lore replete”) (I. vii. 48) の登場を待ち望んだりする。ある意味、この “Some stranger” を探求し続ける物語が『クラレル』であるともいえるが、主人公の現実社会に対する認識が弱いという事や彼自身の信仰が不安定であるという事は、その探求を難しくさせる。

次に問題なのは、イタリア人修道士チェリオ (Celio) である。作者は第一部でクラレルに二つの死を体験させるが、チェリオの死は一つの導入の役目を果たしてゆく。⁴ 十字架の道 (Via Crucis) に、ある日の夕方やって来たチェリオは、ローマの総督ピラトの手にかかりイエスが群集に引き渡された事を想いつつ赤面するが、次のように内面の葛藤を示す。

But, crying out in death's eclipse,
When rainbow none his eyes might see,
Enlarged the margin for despair —
My God, my God, forsakest me?
Upbraider! We upbraid again;
Thee we upbraid; our pangs constrain
Pathos itself to cruelty. (I. xiii. 44-50)

チェリオにとっては人間の弱さを見せるイエスは根本的に困った存在であり、彼はイエスとラザロが死から復活した事実を疑ってゆく。同時に、聖地の自然は、その荒々しさの故に、彼のこの種の疑いを増加させるかのように思える。⁵

実は、この宗教的懐疑に悩まされる修道士とクラレルには、直接言葉を交わす機会是与えられない。初めてギホンの池の所で二人は出会うのだが、修道士の方がいつも先にクラレルの元を立ち去ってゆくのである。事実、クラレルが後日知ったところによれば、チェリオは修道院から抜け出し、病気がもとで二度と帰らぬ人になってしまう。彼の死はシリア人によって見守られるが、彼の遺した日記風の覚え書きの中に、クラレルは自分と同様に信仰に苦しんだ人物を発見する。 “A second self therein he found, / But stronger — with the heart to brave / All questions on that primal ground / Laid bare by faith's receding wave.” (I. xix. 27-30) チェリオはクラレルよりもずっと先に信仰の懐疑の中で虚無に耐える道を彼なりに発見していたといえるが、この「懐疑の世界における対処の仕方」という問題は物語全体に及んでゆく。

現実の問題として、若い主人公にとってチェリオの存在と死は意味深いものであった。チェリオが立ち去った夜、クラレルは夢にまで彼をみてしまうが、彼の死後クラレルは自

ずと死について考える。“Is death the book’s fly-page? / Is no hereafter?” (I. xix. 36-37) 一体、死とは何であろうか。死は人間に何を与えてくれるのか。天国への安らぎはないのだろうか。この種の想いが懐疑の中にある神学生クラレルの心をふさいだとしても、何の不思議もない。死の受け止め方の問題は第四部まで続いてゆく。

虚無に耐えることの他に、チェリオの死がこのように「死」の世界への開眼をクラレルに強いたことは興味深い。第一部における二つ目の死はどういう意味を持つのであろうか。始めて主人公がナタン (Nathan) を見かけたのは嘆きの壁付近においてだが、このユダヤ教に傾倒するアメリカ人は彼の抱く死に対する想いで一つの特徴を持つ。

ナタンは一人っ子としてイリノイ州に生まれ育ったが、父の死後、残された母親の為に苦労してキリスト教的立場を保持するにとどまっていたらしい。その当時のエピソードは、彼の立場をよく表わしている。“The sway / He felt of his grave life,…” (I. xvii. 54-55) 例えば、家の戸口から見える先住アメリカ民族の三つの墓には樹木がおい茂っており、それを若き日の彼は死者が栄養を植物に与えているのだと考えるのである。また、罪汚れのない子羊が落雷に会って死んだり、自然災害の山くずれの為に小父が土砂に埋もれて行方知れずとなった時は、自然現象の中に神意を探ろうとする余り彼は易々とキリスト教信仰を失うのである。

結局、彼はユダヤ人女性アガル (Agar) と知りあって結婚し、全財産を売ってエルサレムへ渡り定着しようとするが、土地のアラブ人の野盗と戦うなどして本来の計画は容易に進展しない。その戦いぶりは、彼の幼児の死によっても弱まることはなく、彼の偏執性はますます強まり、挙句の果てに彼は野盗達に殺され、死体も奪われてゆく。キリスト教を捨てユダヤ人に帰化したナタンであったが、伝道師ネヘミア (Nehemiah) を通してクラレルが知ったナタンの実像は、キリスト教信仰の中で動揺を覚える主人公に別の側面を教える。それは、チェリオの死と異なり、ナタンの死がメシア不在というユダヤ教的な基盤に立ったものであったということだ。また、アラブ人の野盗によって代表されるように宇宙の邪悪・暴力というものによって、ナタンが死んだと解されることである。このことは、一方、神学生クラレルが人間存在の限界としての死を、キリスト教に縛られることなく広い範囲で考えてゆくことができる事をも示している。

ネヘミアの働きでナタンの家族と親しくなれたクラレルだが、ナタンの死には彼にユダヤ民族の慣習・制度の強い閉鎖性を知らせることになる。残された一人娘ルツ (Ruth) とクラレルは、今では民族と宗教を超えて互いに愛を感じるようになっていたが、服喪の間二人は交際を禁じられてしまう。この為主人公はルツとのしばしの別れを余儀なくされ、この町で知りあったヴァイン (Vine) やロルフ (Rolfe) たちと共に巡礼の旅に出る決意をする。ここには未熟な状態を乗り越えたいという気持ちも見られるし、宗教的立場においては、それは次のようになる。

Loath was he here to disentwine
Himself from Ruth. Nor less Lot’s land,
And sea, and Judah’s utmost drought
Fain would he view, and mark their tone:
And prove if, unredeemed by John,

John's wilderness augmented doubt.

(I. xlii. 14-19)

今や主人公にとって大切なのは、キリスト教信仰に対する挑戦である。果たして、懐疑から信仰への転換はあるのだろうか。『クラレル』第一部はカトリック教徒の祝日である聖燭節の二月二日、すなわちイエスを身ごもった聖母マリアの清めの儀式の日に主人公が旅立つことで終りとなるが、イエスやキリストという信仰の問題に戦いを挑む主人公が避けて通れない問題も提示してある。それは、出発前にロルフが語るジョージ・ポラード船長 (Captain George Pollard) のエピソードである。船長は初めカルヴィニズムを拒絶していたが、二度の遭難やカニバリズムという悲劇を体験した後はそれを受け入れるようになったという。果たしてクラレルは、それ程強く人生に神意をくみ取るだろうか。アメリカ人の神学生として信仰の道を探るクラレルだが、選民主義の考えに陥ることの危険性も熟知しているのではなかろうか。

(2) The Wilderness

第二部では十人程の主要な人物と関わることで、主人公の学習は社会的広がりを持つ。また、第一部の終り、エルサレムを出発する前に彼はアルメニア女性の花嫁の葬式行列に出くわすが、そういう物語の伏線が施される中で作者の死への関心は一貫してゆく。

初めに、ゲッセマネの園の近く “The Virgin's Tomb” の近くで一行は立止まるが、ギリシア人の銀行家 (the Banker) は「死」やそれにまつわる心象をひどく毛嫌いしており、この種の精神的態度は作者により否定されてくる。彼と義理の息子グラウコン (Glaucou) がアコルの谷 (「悩みの谷」の意味) に至る前に一行から離れてゆくことがそれを表わしているが、ある点でメルヴィルの理想像といわれるロルフは銀行家に対して、“Unwise he is to venture here, / Poor fellow; 'tis but sorry cheer/ For Mammon …” (II. xii. 26-28) と暗に述べてその愚かさを笑う。人間存在の究極としての死を深く見すえることを避けるのは、メルヴィルの世界においては真理研究の道が閉ざされてゆくこととなる。

だが、「死」の問題をどう深く見すえるかということは、慎重さを要する別の事柄でもある。エリコの町で一夜を明かした翌日、ヴァインとロルフとクラレルは小高い山に登るが、そこで四十日間の断食を終えようとする一人の修道士 (the Syrian Monk) に出会う。ここで暗示されているのはサタンによるイエスの誘惑ということだが、⁶ 蛇による信仰試問がなされる場面で僧侶はこう答える。

… ‘Why beat the bush in thee?
It is the cunningest mystery:
Alive thou know'st not death; and, dead,
Death thou'lt not know.’ — ‘The grave will test;
But He, He *is*, though doubt attends;
Peace will He give ere come the end.’ — (II. xviii. 121-26)

探求し続ける者にとって、死の壁は実存的に常に眼前に聳え立つということが暗示されて

いるのだが、巡礼者にとって探求が早々と終わりを遂げるのは『クラレル』の物語においては望ましいことではない。

結局、シリア人修道士は“sin of doubt” (II. xviii. 38) を覚えて荒野に入り、同様の立場で悩みを抱く主人公と違い喜びの内に救いを見出し修行を終えてゆくが、この種の楽天的理解で生きる楽しみを得ている巡礼者も一行の中にいる。地質学者のマーゴット (Margoth) がそれである。彼は地質調査の為にハンマー (科学の象徴) を携えて聖地へ来ていたが、そのまま巡礼者として旅の仲間に加わっている。信仰や懐疑という宗教の問題に多かれ少なかれ関わっている一行の中であって、この科学を基として生きる楽観的人物の存在は特異だ。ヨルダン川近くで、死海に掛かる虹を見て沈黙の感動を皆が得ている時の彼の態度はどうであろうか。もう一人の楽観的人物と大方の読者がみなすダーウェント (Derwent) でさえ虹を手向けの花 (“The rose upon the coffin”) (II. xxix. 151) と表現しているのに、マーゴットはそれを聞いて虹には約束 (“The covenant made on Noah’s morn”) (II. xxix. 154) はない、希望はないと皮肉る。そして、ソドムやゴモラ等の今では死海に没している古代都市と旧約聖書に表わされる人間の罪について皆が語っている時、彼は端的にこう述べる。

“Tut, tut — tut, tut. Of aqueous force,
Vent igneous, a shake or so,
One here perceives the sign — of course;
All’s mere geology, you know.” (II. xxxiii. 48-51)

マーゴットにとって科学で解釈のつかぬ神秘の世界は存在しないが、彼の上記のような説明が終るや否や、ちょうど死んだ人間が死海から彼に叫ぶかの如く、 (“as if retort/ From all the damned in Sodom’s Sea / Out brayed at him.”) (II. xxxiii. 78-80), ロバの鳴き声が聞こえてきたと語り手は述べる。ユダヤ人でありかつ科学者であるマーゴットへのこれは作者の皮肉になっている。

『クラレル』には幾人かのいわゆる奇人が登場するが、巡礼の旅においてこういう人々とさらに触れあうことで、死の存在に対して人がとるべき距離についてもクラレルは考えてゆく。

その一例がモートメイン (Mortmain) の場合である。このスウェーデン人は裕福な家庭に生まれながら、出生と家庭の問題に悩み革命運動に身を投じるなどして救いを求めていたが、結局人間の本性が邪悪であり罪に汚れていると絶望する。その行動は奇抜であり、唯一彼はエリコの手前エリシャの泉で一夜を明かすことになる。そして再び姿を現した時、彼はこうつぶやく。

“But, hectored by the impious years,
What god invoke, for leave to unveil
That gulf whither tend these modern fears,
And deeps over which men crowd the sail?” (II. xxxiv. 24-27)

彼にとって悔い改めは人類にとって必要不可欠なものであり、ガイドのジャーレア (Djalea) が制するのも聞かず死海の水を飲んで (“madly tried the gall”) (II. xxxiv. 67) しまうのはそのためだ。そんなモートメインが、ラクダの頭骸骨の上に腰を据え、水中に見え隠れする都市とそのことが暗示する計り知れない人間の罪について話してゆく時、他の者達が一人また一人と彼の元を去ってゆくのも暗示的だ。というのも、モートメイン程人間の罪と死とを分かち難い位に結びつけ、自らの存在を危険に追い込む人物はいないからだ。

かように罪というものに深くこだわり続けるモートメインであるが、語り手は「序曲」という一編の中で、人間の心は迷路という部屋であり、そこには “mystery of iniquity” (II. xxxv. 24) がみられると述べる。このパウロが用いた言葉は柔軟性を秘めており、決して硬直化したモートメインの態度を肯定していない。その意味で、第二部の終りがもう一人の奇人ネヘミアの死の場面で閉じられることには意味がある。彼はクラレルの供をしてついてきたのだが、死海の岸辺に張られたテントの中で「黙示録」の世界すなわち New Jerusalem の復興の夢をみる。そして夜間、眠りから半ば覚めた形で起きあがり、そのまま死海へ入って帰らぬ人となるのだが、早朝彼の死体を目にするのは他ならぬヴァインである。読者の記憶には、アラブ人に無視されるネヘミアを見て気の毒に思ったクラレルや、彼に対してひとかどのやさしさを示したヴァイン等の第一部におけるエピソードが蘇ってくるが、作者はネヘミアの死についてはかなりの紙数を与えている。埋葬の仕方はもちろん、各人の彼の死に対する反応が詳細に述べられる。モートメインの口の中で死海の水の苦味が消えてゆかないのに対して、作者はロルフにネヘミアの死は喜ばしいこと (“Gladness”) (II. xxxix. 84) といわしめる。そして、故人が好んでいた「詩篇第23篇4節」(ダビデの歌) を口ずさんだ後、⁷ 全員はひざまづいて別れを告げることになるが、驚いたことに遠くで起きたなだれの音が木霊となって伝わってくる。明らかに、ここには作者の演出がある。単なる奇人の死で物語が終るのではなく、そこには一つの美の世界が付加される。

They turn; and, in that silence sealed,
 What works there from behind the veil?
 A counter object is revealed —
 A thing of heaven, and yet how frail:
 Up in thin mist above the sea
 Humid is formed, and noiselessly,
 The fog-bow: (II. xxxix. 149-55)

ここにあるのは聴覚と視覚の世界であるが、朝霧の中から霧虹が顔をのぞかせるという、いわば山なだれが引き起こした微かな不安に対して配置された美と平安の印という構図は、一体何を暗示しているだろうか。恐らくそれは、銀行家やシリア人修道士、マーゴットやモートメインといった表立った人物と異なり、その素朴な信仰の故に自らの教義を否定することをせず預言的世界の到来を夢みて死んだ伝道者ネヘミアに対する、メルヴィルの愛情であろう。ただ一途に伝道の使命を帯びて生きてきたネヘミアへの恵みとしての死で、

この第二部は終りを遂げてゆく。確かに天国らしい霧虹の光は弱く、それはただの美しい自然現象として機能を果たすに過ぎない。とはいえ Browne が述べるように、ネヘミアは“monomaniac”であるが、それだけの存在だとい切ることができない要素がここには含まれている。⁸

(3) Mar Saba

一行はシデムの平原を越えて Mar Saba 修道院へと向かうが、第三部は前部にもまして死の心象や事柄に満たされている。⁹ Mar Saba へ至る山道をつたって行く主人公達は谷底に野ざらしになっている二つの人間の死骸を目撃したり、途中で死んで横たわっているラクダに遭遇したりする。修道院は険しい山の上に位置し、容易な進入は許されない。かように外部から遮断された場所でクラレルが経験する事柄には、それ以前にはないものが期待される。

二日目の夜、松明に照らし出されて演じられる仮面劇 (The Masque) を彼らは鑑賞するが、顔を覆った劇中人物は「彷徨えるユダヤ人」としての苦しみを切々と述べ舞台から歩み去ってゆく。その人物にとって罪は許されないものであり、メシアの不在は永遠の苦痛となっている。この劇は巡礼者達に感動を与えるが、ユダヤ人に帰化したナタンとは別の意味のメシア不在というユダヤ教的世界は、この第三部においては重要なテーマとなっている。現に Wright は、『クラレル』における旧約聖書と新約聖書の心象の問題を早くから指摘している。¹⁰

次の日、クラレルはダーウェントに自分の宗教的懐疑を打ち明ける。それは亡くなったネヘミアが話していた「孤独の内に死んだ大工」のエピソードが彼の心を刺激していたせいもあるが、人間の罪と許し、あるいは愛や受容といったものが自ずと彼の心を占有していたからに他ならない。信仰が弱体化している現状が悩みとなっている主人公にとって今こそ必要なのは案内人 (“Pilots”) (III. xxi. 150) であるが、何事にも楽観的なダーウェントは悩みは若者にありがちなことと述べつつ、次のような判断を下す。

Then said: “Alas, too deep you dive.
But hear me yet for little space:
This shaft you sink shall strike no bloom:
The surface, ah, heaven keeps *that* green;
Green, sunny: nature’s active scene,
For man appointed, man’s true home.” (III. xxi. 312-17)

この種の指針は信仰の問題に今さらされている主人公をとまどわせるばかりか、その行いの故に愛着をもった故人のネヘミアに対して「孤立で正しいのか」 (“alone art true?”) (III. xxi. 328) と彼に問い掛けさせることも可能にする。クラレルはかように「孤立」の立場にいたのであり、しかも「孤立であること」の積極的意義について学びを果たすには第四部の結末を待たねばならない。

先に述べたような案内人を求める主人公に、答えは容易に与えられない。むしろ二、三の出来事により彼の心は沈潜化する。その一つが、キュリロス (Cyril) との出会いであ

る。キュリロスはその昔兵士であったが、今では経帷子を身につけて小さな洞窟に暮らしている。モートメインとの出会いで明らかのように、彼にとって「希望」は過去のもの（“pass-word for yesterday”）（III. xxviii. 33）であり、「絶望」こそが今の時を表わしている。そうであるからこそ、通過する旅人に、「死」という合言葉を求めるのである。このキュリロスの姿は母親の代わりに Mar Saba へ奉納物を献げに来て、帰りしなに彼女の為にヨルダン川に経帷子を浸しに行こうとしている陽気なキプロス島から来た男（The Cypriote）と対比的であるが、かくも異常な環境の下で、見る者各々に安心を与えてくれるのが「千年シュロ」である。

一般的には“palm tree”は空高く伸びた姿と多数の結実状態から「優雅と繁栄」の象徴とされ、『ヨハネ福音書』では「勝利」の意味を示すものとしてさえ扱われているが、『クラレル』の世界では見る者に異なる影響を与える。例えば、狂人として亡くなっているギリシア人修道士ハビビ（Habbibbi）の家の戸口には、後日主人公達が知るようにダントの「地獄編」が置かれているが、「千年シュロ」の存在にも関わらず救いのない死に方を迎える者はいる。

語り手は「千年シュロ」に対する主要な人物の反応を描く。先ず、クラレルが最も好意を抱いているヴァインの眼には、それは天国を約束するもの、あるいは“Stem of beauty, shaft of light”（III. xxvi. 46）として映る。この反応にはヴァインの審美観が生かされている。また、モートメインは偶然認めたこの樹木が一つの天国の印として彼を招き寄せているように感じる。そして、ロルフは以前船乗りとして訪れた南海の島々を、この「千年シュロ」がエデンの心象で想起させてくれたと喜ぶ。クラレルにとっても、この樹木の存在は大きい。この緑の樹木は信仰の問題を新たに彼に提供するきっかけともなる。というのも Mar Saba には平安の象徴であるハトに餌を与える禁欲主義者（The Celibate）がいるが、懐疑の中で心を揺らすクラレルにとって純粋な心の持ち主とみえるこの修道士はひとつの理想となるからだ。と同時に、禁欲主義者と接触することで、もう一つの理想であるルツの存在も彼に思い出されてくる。

結局、「千年シュロ」は見る者の心の願望や心理状態を映し出す鏡の役目を果たしているといえそうだが、『クラレル』の主要な上記の人物達は実は互いに離れた所において緑の樹木を見ているのである。よって、互いの見解に通じているわけではない。あくまでも彼らは「生の領域を越えた所の象徴物」に対して孤立という立場で各々が向かいあうのであり、それはある種実存的立場を信仰が求めることを示している。

ところで、この「孤立」の立場を違う観点から考えるとするならば、第三部には興味深いエピソードが見出せる。例えば、モートメインは「千年シュロ」に遭遇する直前、「天国」の平安を表わすハトではなく、別の大きな名もない鳥によって空からの攻撃を受け“skull-cap”を奪われてしまう。この事件は少し離れたところにいる数名の者により目撃され、以後話の種になる。ダーウエントは自分も同じ経験があると告白するし、レスボス島の男（The Lesbian）は若い時アガト（Agath）が太平洋の真只中で“wool-cap”を見張中に奪われ、鳥のあざけるような声を耳にしながら海中に落下した事実などを話す。無論、これらは作者好みのエピソードであるが、「孤立」の状況において人が天界からの挑戦を受けるという構図は多分に象徴的である。特に「死」の心象に満ちた第三部におけるこの象徴的構図の導入は、「生を超えた世界」を眼前にした人間存在の在り様という意味

で意義深い。

そしてこういう構図があるからこそ、同種の体験を持つダーウェントは、その楽観性の故に存在の危機に落ち入ることは決してなく、一方モートメインの方はメシア不在という現実認識の故に生の向う側へと渡ってしまう。「千年シュロ」を見た翌日、もしやというクラレルの直観に導かれて一行が来てみると、モートメインは口唇に忌むべき鳥の一種とみなされるワシの羽根を一本のせて横たわっていた。明らかに、モートメインは敗北の内に生を終えているのであり、この後の彼の埋葬描写は、第二部におけるネヘミアのそれと対比的である。聖なる朝というものは彼には訪れず、ロルフのみが辛うじて一人呪文らしきものを唱える為にとどまり、僧侶達は死体を岩山の道に埋める作業を行う。いかにも狂人の彼にこそ相応しい、彼の望みうる死であったかも知れぬ。

「どんな想いが天国には存在するのか？」（“What reveries be in yonder heaven”）（III. i. 1）という語り手の問いかけで始まった第三部であったが、メシア不在という絶望で悩み苦しむ者達を見ることで、また象徴的「千年シュロ」と孤立の立場で関わることで、クラレルはモートメインとは違った方向に足を踏み出すことになる。今や彼にとって大切なのはイエスが説いた愛の教え（“turn the cheek”）（III. xxxi. 22）であり、混沌とした状況の中で彼は「砂漠」に向かって祈る（“invoking”）（III. xxxi. 59）のである。ともかくも、第一部では不可能だった祈りがここでは果たせるのであり、物語は彼を愛の対象物の喪失や受難という世界へと導いてゆく。

(4) Bethlehem

モートメインの過度の信仰は彼の存在を消滅させてしまったが、第四部では新たに四名の者が一行の巡礼に加わり、主人公はいよいよ信仰の問題を幅広く体験する。

その中の一人アガトは、ベツレヘムに向かう途中、サソリを見ては邪悪の使者だと解する程に神意を読み取ることに熱中する男だが、船が難波して火山島で生き延びる術を探し求めたことを物語ってみせる。彼の前腕には十字架の入れ墨が彫っており、彼にはどころなく忍耐の趣きが備わっている。それは彼が陸亀と夜露とサボテンを頼りにして火山島で生きなければならなかった事と関係があるが、クラレルを惹きつける程の美的資質を十分に表わしていない。酒本雅之は、その点を「少なくともクラレルは、ひたすらに耐えるアガスの「従順」な姿に、真実を認識することの至難さを読みとっている。」と述べる。¹¹

このアガトの体験は聴く者を驚かすに十分であったが、クラレルには自分達が渡っている荒野がその火山島の如く感じられ、孤立の内に宇宙の謎について考えることの厳しさがわかりかけてくる。この意味で、彼が人間の認識能力の限界（“What may man know?”）（IV. iii. 109）について想いを馳せるのは自然なことといえよう。

だが、「千年シュロ」の場合と同様、陸亀については聴く者の反応は種々である。英国系カトリックの血をひくアンガー（Ungar）も奇人の一人であるが、彼について語り手は次のように描写する。

At chance allusion — at the hint
That the dragged tortoise bore the print
Of something mystic and debased,

How glowed the comment in his eyes:
No cynic fire sarcastic; nay, (IV. v. 13-17)

彼は先住アメリカ民族系イギリス人という自分のアイデンティティーについて深く悩んで生きているが、アガトの場合と違ってより審美性に富んだ感受性の持主である。彼が陸亀を単なる「忍耐」の象徴と解釈しないのはその為だが、ベツレヘム到着の夜に彼の救い主となるのは自然の美しい星々である。“Look up: the age, the age forget — / There's something to look up to yet!” (IV. vii. 100-101)

翌日、苦しみの人としてのアンガーを宗教的に感動させるものには、彼は出会う。それは古い石製の記念碑で、三つの銘板がはめ込んである。その一つは、かすかな血を滲ませながらも柔順に毛を刈る者に身を任せている子羊の姿を表わすもので、明らかに新約聖書の世界の暗示である。¹² そこには「忍耐」と「柔順」の美しさがあるが、宗教的懐疑の中に激しく身を置くアンガーには時として刺激的でさえある。神のことはさておいても、救い主としてのキリストの存在は信仰の枠外にある彼の脳裏には、キリストに従う者は唯の苦痛の人 (“The Calvary-faces”) (IV. x. 49) に見えてしまう。

語り手から “A wandering Ishmael from the West” (IV. x. 189) と呼ばれるアンガーだが、彼の激しさは幾人かの人物 — サルウァテラ (Salvaterra), ロルフ, ヴァイン, ドン・ハンニバル (Don Hannibal) — との関わりでその価値を発揮する。サルウァテラはイタリア人修道士だが, “I trust tradition!” (IV. xiii. 202) と告白する程、その信仰は固い。クラレルにとっては、プロテスタントのネヘミアに対抗するカトリック的理想像といえなくもない。そういうサルウァテラがアンガーの所持する刃についている十字架を誉める時、アンガーはむしろ感動 (“touched seemed”) (IV. xiv. 31) してしまう。アンガーの信仰熱は冷めきってはいない。また、ロルフはアンガーのことを「軍人的思想家」と評価し、彼との折合の悪いダーウエントに向かっても “He's wise.” (IV. xxiii. 32) と述べる。さらにヴァインは, “What means it then, this wickedness?” (IV. xxii. 31) とアンガーに問うたことがあるが、彼はそれをカルヴィン主義的な原罪だと説明する。つまり、素朴な信仰と激しいキリスト教への不信感の混在がアンガーを形成しているのだが、彼の姿はドン・ハンニバルのそれと比較できる。ドン・ハンニバルはメキシコの自由の為に戦った軍人だが、今では “*reformado reformed*” (IV. xix. 77) として,¹³ 片手・片足という身体的ハンディーを負いながらも生きていく覚悟である。一方、アンガーの人間観は次の通りだ。

“... What's implied
In that deep utterance descried
Which Christians labially confess —
Be born anew?” (IV. xxii. 40-44)

十字架の飾りのついた刃を所持していても、アンガーによれば新生とかありえないことだ。

この後、語り手はもう一人重要な人物をクラレルに引きあわせる。それはリヨン出身の放蕩者 (The Prodigal) というクラレルが一夜を共に過ごすはめになる男であるが、「禁

欲」をサルヴァテラが代表するのに対し「快樂」を放蕩者が代表するというクラレルの判断は正しい。けれども、放蕩者は別の問題も提起している。彼とは一夜の交際であったが、主人公は彼の知人であるロシア人巡礼者ドン・ロヴェンナ (Don Rovenna) の口を通して、放蕩者がフランス系ユダヤ人でありながらあえて社交の為に素姓を隠している事実を知る。つまりこの点においては、ネヘミアを頭とした奇人と思いき人々が正直すぎる位正直なのであり、若き神学生クラレルには「宗教的アイデンティティー」という課題が与えられるのだ。

いよいよ五旬節の火曜日 (Shrove Tuesday) の夜、エルサレムへ向けて一行は出発する。ちょうど聖灰水曜日の前日にあわせたかのように、数々の経験によって学習活動を行ってきた主人公の顔には曇がない。第三部において確認することになったイエスの愛の観念は今やクラレルを希望の世界に導き、¹⁴ 彼はアガルとルツをアメリカに連れ帰る気持でいる。また、クラレルは物語で初めて、"Ah! God, keep far from me / Cursed Manes and the Manichee!" (IV. xxix. 102-103) と神に向かって祈るのである。

しかしながら、エルサレムの南側ヒンノムの谷に入った時、主人公は今まさに埋葬されようとするアガルとルツの死体を確認する。明らかにこれは犠牲者としての「無垢の死」であり、主人公に対する最後の挑戦である。彼の "O blind, blind, barren universe!" (IV. xxx. 100) という嘆きは自然の反応であるが、信仰が完全に熟していない彼は絶望状態に陥る。

いわば、物語は上昇から下降へと急転するのだが、今までの主人公の学習は成果を表わさないわけではない。灰をかぶって懺悔するカトリックの罪の清めの儀式である聖灰水曜日 (Ash Wednesday) の翌朝、エルサレム城内へと入った巡礼者であったが、クラレルのみが四十日間の断食 (Lent) を体験し、さらには他の仲間が出発した後も現地に残って、復活祭の後の第七日曜日にあたる聖霊降臨日 (Whitsunday) に十字架の道を歩いてゆくのが語り手により描写されるのだ。聖霊降臨日は別名ペンテコステともいうが、「使徒行伝第2章」によればイエスがキリストとして復活した後、聖霊が使徒たちに降臨したのを祝う記念日だという。だが、たとえキリスト教について伝道を許される象徴的な日であっても、絶望の内にある主人公には、それはただの出発日ではない。今やクラレルに与えられているのは新たな探求であるが、ドン・ハンニバルがベツレヘムの宿舎の中庭で棺桶に入ってみせたような「喪失」や「復活」という象徴的意味は彼にとっては無縁だ。¹⁵ 受難日 (Good Friday) に主人公は亡くなった六人の男女の行進を幻の内に見るが、彼はキリストの存在を信じているわけではないし、「死」の向こう側の世界に惹かれるわけでもない。彼は「旅人」ではなく「求道者」として孤立的対話を神と行うために新たな旅に出掛けるのであり、その行為は放蕩者が逆接的に教えてくれた宗教的アイデンティティーに満ちている。聖霊降臨日の一場面は、次のようになっている。

But, lagging after, who is he
Called early every hope to test,
And now, at close of rarer quest,
Finds so much more the heavier tree? (IV. xxxiv. 45-48)

このように苦難の探求がさらに神学生クラレルには予想されるのだが、語り手の働きにも留意する必要がある。語り手は“Clarel was young.” (I. xxxi. 43) と第一部で述べていたが、第二部ではヴァインの沈黙の声を通して、“Art thou the first soul tried by doubt? / Shalt prove the last?” (II. xxvii. 124-25) と彼を力づけ、さらに第四部のエピローグすなわち『クラレル』の最終行では“Emerge thou mayst from the last whelming sea,/ And prove that death but routs life into victory.” (IV. xxxv. 33-4) と彼を励ましている。ここでの語り手は、明らかにクラレルの擁護者である。ただし、語り手と作者を同一視してよいのかという疑問も生じる。Warrenは、さらにメルヴィルの他の詩群についても調査し、『クラレル』の結末と同様のものがそこにも見出せると指摘し、作者メルヴィルが最後にたどり着いた境地を暗示するが、¹⁶ 主人公や作者はキリスト教信仰の懐疑から普通の意味で脱却したといえるだろうか。

結 論

1856年11月20日、Nathaniel Hawthorneは手記の中で次のように書きあらわした。

Melville, as he always does, began to reason of Providence and futurity, and of everything that lies beyond human ken, and informed me that he had “pretty much made up his mind to be annihilated.”¹⁷

この言葉は大変馴染み深いものであるが、ちょうど20年後に『クラレル』は発表された。メルヴィルがこの時ホーソンに述べた事柄が、読者としては気になるところである。

本論で詳述した如く『クラレル』の宗教問題を考える時、登場人物たちの「死」は軽視されるべきではない。死はキリスト教と深く結びついているからだ。第一部での主人公クラレルは、現実をいまだ深く理解できない若い神学生の立場でキリスト教発生の地エルサレムを訪ねる。彼はそこでイタリア人修道士チェリオやアメリカ人のユダヤ教徒ナタンの死に直面するが、それは彼にとって初めて求道者と死の関係を意味づける機会でもあった。チェリオの死は虚無に耐える人生の姿を、またナタンの死はユダヤ教の意味をクラレルに教えることになる。第二部は荒野を通過する巡礼の旅で始まるが、複数の巡礼者との交わりを通してクラレルの死に対する理解は深まってゆく。特に素朴な伝道者ネヘミアの死は、その生き方と死という点で彼を感動させる。徐々に机上の学問から抜け出して現実世界の中で視野を広めていく主人公は、第三部においては過度の信仰により死ぬ羽目になったスエーデン人モートメインの救いのない世界を目撃する。そして第四部では主人公は宗教的アイデンティティーの尊さを認識しつつメシアを受け入れる備えをするのであるが、結局のところは未熟な信仰の故に、アガルヤルツが代表するような「無垢なる者の死」という究極の事例を前にして高まりつつあったキリスト教信仰の熱を瞬時の内に失うのである。

もっとも、ここでは愛する対象者の「無垢なる者の死」は単なる喪失として済まされるのではなく、主人公をさらに一歩上の段階で探求させる契機となっている。クラレルに課せられるのは、試練という十字架を負いつつ神との孤立的対話を行う作業である。¹⁸ 作者はエピローグの編で語り手を通して励ましと慰めの声を若き神学生に送るが、この結末は

人間と宇宙の謎の問題に長い間関わってきた作者の肉体的・思想的熟成をも代弁している。そこには暗闇から脱出できた苦闘の人間メルヴィルが辿り着いた希望の世界があるのであり、そういう意味では20年前にホーソンに洩らした彼の絶望感はいつの間にか消えているといえる。

では、『クラレル』はロマンティックな高揚感を読者に与えて終わるのだろうか。読者には語り手の主人公への励ましの声が残っているが、キリスト教の神学生クラレルがメシアであるキリストを果たして受け入れることは可能かといえば難しい気がする。昨今ではメルヴィル自身のユニテリアニズムが確認されているが、¹⁹ 人間イエスの立場からいえばクラレルはこの先も神とだけ対話をしなければならない。

*本稿は四国学院大学『論集』（第66号，1987）（39-62）に掲載された論文（『クラレル』における死の動因）を加筆修正したものである。

注

1. Ronald Mason, *The Spirit Above the Dust* (Mamaroneck, N.Y., Paul P. Apple, 1972), p. 226.
2. Stanley Brodwin, "Herman Melville's *Clarel*: An Existential Gospel" (*PMLA*, Vol.86, 1971), p. 380.
3. Herman Melville, *Clarel — A Poem and Pilgrimage in the Holy Land* ed. by Walter E. Bezanson (N.Y., Hendricks House, 1973), p. 5. 以下、原作品『クラレル』の引用に関しては、この引用例に倣うものとする。
4. John Seelye, *Melville: The Ironic Diagram* (Evanston, Northwestern University Press, 1970), p. 139.
5. 「聖地の自然は根本的に邪悪により支配されている。」と William Shurr は説く。*The Mystery of Iniquity: Melville as Poet, 1857-1891* (Ann Arbor, University Microfilms International, 1985), p. 96.
6. Op. cit., Herman Melville, pp. 599-600. Walter E. Bezanson の "Explanatory Notes" は非常に厳密である。
7. 「詩篇第23篇 4 節」参照。「あなたが共におられるからです。」と、全員で神の存在を認めて祈っていることを表す。
8. Ray B. Browne, *Melville's Drive to Humanism* (Lafayette, Purdue University Studies, 1971), p. 330.
9. Op. cit., William Shurr, p. 113. 彼はメルヴィルの宗教意識に着目してこう述べる。"Melville takes quite literally the ancient Christian linking of sin and death."
10. Nathalia Wright, *Melville's Use of the Bible — With a New Appendix by the Author* (N.Y., Octagon Books, 1974), p. 113.
11. 酒本雅之, 『砂漠の海 — メルヴィルを読む』, (研究社, 東京, 1985), p. 401.
12. 「イザヤ書第53章 7 節」参照。
13. 須山静夫, 『クラレル — 聖地における詩と巡礼』, (南雲堂, 東京, 1999), p. 859.

スペイン語で「改心した者」の意とある。

14. John Bernstein, *Pacifism and Rebellion in the Writings of Herman Melville* (Philadelphia, Richard West, 1977), p. 199. Bernstein は男女愛とキリスト教の愛の観念とを完全に切り離す立場にいるが、クラレルの愛の対象者は母親アガルをも含む。
15. Geoffrey Stone, *Melville* (N.Y., Octagon Books, 1976), p. 294.
16. Robert Penn Warren, *Selected Essays* (N.Y., Vintage Books, 1958), pp. 196-98.
17. Richard H. Brodhead, *Hawthorne, Melville, and the Novel* (Chicago, The University of Chicago Press, 1976). p. 197.
18. John T. Frederick, *The Darkened Sky — Nineteenth Century American Novelists and Religion* (Notre Dame, University of Notre Dame Press, 1969), p. 115. Frederick は、「クラレルが表舞台から一歩引き下がることで、彼が代弁する普遍的テーマがより読者にわかりやすくなった」と述べる。
19. Stan Goldman, *Melville's Protest Theism — the Hidden and Silent God in Clarel* (DeKalb, Northern Illinois University Press, 1993), p. 66. メルヴィルの強調点はキリストではなく苦悩するイエスの方に置かれていると述べる。William Potter, *Melville's Clarel and the Intersympathy of Creeds* (Kent, The Kent State University Press, 2004), p. 205. New York City の All Souls Church というユニテリアン派の教会に、メルヴィル夫妻は散発的に通っていたと述べる。また、メルヴィルの父親もユニテリアン派に転向した人物らしい。